

# 生きもののせかい

2026年4月3日(金) – 6月28日(日) 会場：常設展示室

※月曜休館 ただし、5月4日(月・祝)は開館、5月7日(木)は休館。

※開館時間 9：30 – 17：00

※学芸員によるギャラリートーク 4月25日(土)、6月21日(日)

ふくふくおはなし美術館(対話型鑑賞会) 5月2日(土)、6月14日(日) いずれも 14：00 より

## 1. はじめに

長い冬を越えて、生命が芽吹く春。ふくやま美術館では、色とりどりの生きものが息づき始めます。

動物は古くから人々の暮らしや想像力と結びつき、身近なモチーフとして絵画や工芸・彫刻など、多様な形で表現され続けてきました。ひとくちに動物といっても、人々が捉えた命の形は実にさまざま。写実的に表現された生きもの、物語の中で描かれた生きもの、骨や化石として描かれた生きもの、想像上の生きものや、擬人化された生きもの—そこには、私たちの想像をはるかに超える表現に満ち満ちた「生きもののせかい」が広がっています。

本展では、身近な存在である犬や猫を入口として、地上のせかい、海のせかい、空のせかい、ふしぎなせかい、小さなせかいへと視点を移します。西洋・東洋、近世から現代、絵画から工芸に至るまで、空間と時間、表現の方法を横断しながら、作家の手によって表現された生きものたちを通して、人間の想像力と表現の広がりを感じていただければ幸いです。

## 2. 身のまわりのせかい

最初に目を向けるのは、私たちの暮らしに近い生きものたちです。もっとも身近な存在といえば、犬や猫でしょう。犬は家畜化された最古の動物として人間と共生してきたとされ、猫も約10,000年以上も前から人間の生活圏に寄り添ってきたともいわれています。現代では、彼らは「愛玩動物」や「伴侶動物」とも呼ばれ、家族の一員として慕われる存在となっています。

少し余談になりますが、私たちはなぜ、犬や猫に対してこれほど強い愛着を抱くのでしょうか。動物行動学者のコンラード・ローレンツのベビースキーマ理論によれば、大きな目や丸い輪郭といった幼児的特徴は人間の保護本能を自然に引き出すとしています。これにより、私たちがそのような特徴をもった動物を見たときに「かわいい」と感情がわき出すそうです。もちろん、美術作品に置き換えた時に動物を主題とした作品に対して同じ理論をあてはめて全てを説明できるわけではありませんが、動物表現に強く惹かれるファンが少なくないのは、こうした心理的要因も無関係ではないでしょう。

それでは、本展に登場する犬や猫に目を向けてみましょう。大村廣陽（1891–1983）の《猫に芥子》(no.2)は、日常の延長にある穏やかな存在として写実的に描かれています。廣陽が猫を飼っていたという記録は見つかっていませんが、動物をつぶさに観察して描いたであろう正確な描写の中には、猫に向けられた温かなまなざしが感じられます。

一方で、吉原英雄（1931–2007）の版画集『ペット・ショップ』に収められた《ガラスの向こう側》(no.3)や《蟻の観察》(no.4)において表現された犬や猫の描写はやや趣を異にします。吉原は「『ペット・ショップ』開店によせて」<sup>(1)</sup>の中で、オープニングに来た人から動物好きだったのかと質問されたことに対し、「特別動物が好きなほうではないし、犬や猫も飼っているが、特別可愛がっているということもない。(中略)私は、あくまで人間の日常の中の断面として作品を考えたいから『ペット・ショップ』でやることにした」と語っています。客観的なスタンスで人間と関わるペットとしての動物をモチーフに用いており、大胆な構図や彩色によって、何かの場面の一部分を切り取ったかのような物語性を生み出しているといえます。

また、草間彌生（1929– ）の《私の犬のリンリン》(no.8)は、草間の代名詞ともいえるドットに覆われた愛らしいオブジェです。犬の背中には携帯電話が収納されており、2009年にKDDIから携帯電話として発売されました。《Hi, Konnichiwa (Hello!)》(2004)には少女と犬をモチーフにした立体作品が登場していますが、



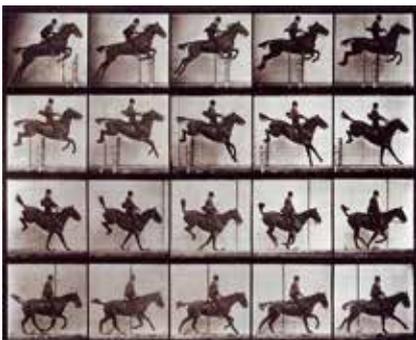
No.3 吉原英雄《ガラスの向こう側》1979年



No.8 草間彌生(私の犬のリンリン)  
2009年© YAYOI KUSAMA (寄贈: KDDI株式会社)

草間作品の中で犬は繰り返し現れるモチーフとなっています。草間は、「私の成長期に遂げられなかった、幸福への願望」を投影していると語ります<sup>(2)</sup>が、その横に佇む犬たちもまた、草間の考える幸福の象徴の一端を担っていると捉えることができます。

このように、犬や猫というモチーフであっても、日常の写実描写もあれば、社会を映す鏡とするもの、個人の心象を象徴するものもあり、作家によって表現の方向性や意味づけは大きく異なります。犬や猫たちが私たちにとって身近な存在であるからこそ、作家の視点やその表現の違いがはっきりと感じられることでしょう。生きものをどう捉え、何を表そうとしているのか — その差異に目を向けることで、作品の見え方はさらに豊かになるでしょう。それでは本展中のいくつかの作品を取り上げてみましょう。



No.10 エドワード・マイブリッジ  
《動物の運動 #637》1887年頃

### 3. 作者のまなざしとさまざまな表現

#### 動きを捉える

動物の「姿」ではなく「動き」に目を向けた作家もいます。イギリス生まれの写真家エドワード・マイブリッジ(1830-1904)は、渡米後、西海岸の風景写真を撮影していました。そこで出会った資産家リーランド・スタンフォードの支援を受け、1つの問いに立ち向かいます。スタンフォードの競走馬オクシデントについて、「4本の脚がすべて地面から離れる瞬間があるのか」という問いです。

マイブリッジは競馬場に複数のカメラを並べ、走行に合わせて電動シャッターを作動させ、約1/1000秒の高速連続撮影に成功しました。その写真をコマ割りに編集して動きごとにまとめられたのが写真集『アニマル・ロコモーション』(1887)です。(《動物の運動 #630》(no.9)、《動物の運動 #637》(no.10)) このマイブリッジの試みにより、私たちの肉眼では捉えきれない動物の動きを分解し、瞬間や動きの連続性が可視化されました。こうした表現手法の発展はその後の静止画から動画への映像表現の展開にもつながり、表現の可能性を押し広げます。

#### 神話・物語から描く

神話や物語もまた、動物表現の重要な源です。福沢一郎(1898-1992)は日本にシュールレアリズムを紹介した洋画家で知られますが、「地獄篇」シリーズや神話・聖書などを主題とした作品を多く手掛けています。《ヘラクレスと牛》(no.15)は、ギリシア神話の英雄ヘラクレスと牡牛が対峙する場面を表しています。海神ポセイドンがクレタ島の王ミノスを罰するために送り込んだ牡牛。ヘラクレスは「12の功業」の1つとして格闘し、これを素手で捕らえます。画面中央に牡牛が大きく描かれその力強さや凶暴さを物語り、その横には無謀な戦いに立ち向かうヘラクレスが描かれています。

一方、圓鏢勝三(1905-2003)の《北きつね物語より》(no.22)は、1978年公開の「キタキツネ物語」(監督: 蔵原惟繕)から着想を得たものです。映画ではオホーツク海近くでたくましく生きるキタキツネの生態を追い、四季の移ろいのなかで生まれ、成長し、親元を離れて生き抜いてゆく子ギツネたちの姿を描いています。作品には見守る存在として木の上に擬人化して表された親ギツネとそのもとに集う子ギツネ、そして巣立とうとする1匹の子ギツネの姿が見られます。圓鏢は本作のコメントとして「出て行く1匹のキツネは淋しげに、『過去には楽しい思い出もあった』と過ぎし日々を懐かしんでいる」<sup>(3)</sup>と述べています。キタキツネに託された感情は、わたしたち自身の記憶や郷愁にも重なるでしょう。

#### 骨となった生きものを捉える

生きた姿ではなく、骨となった生きものに強く惹かれた作家もいます。20世紀のイギリスを代表する芸術家のヘンリー・ムーア(1898-1986)は、ある日、友人で生物学者のジュリアン・ハクスリーから贈られた象の頭蓋骨に強い興味を抱き、『象の頭蓋骨』の版画連作(no.25-30)を手がけました。



No.15 福沢一郎  
《ヘラクレスと牛》



No.22 圓鏢勝三  
《北きつね物語より》1981年

象の頭蓋骨からムーアは何を感じ取ったのでしょうか。図版冒頭では、ムーアの言葉として象という存在について、次のように紹介されています。<sup>(4)</sup>

私自身も過去の芸術家たちのようにいつも象に魅了されてきた。象は地上に生きる動物の中で最大の存在であり、同時に先史時代の世界と私たちを結びつける、きわめて驚くべき生きたつながりでもある。(中略)象には、強さと繊細さが驚くほど混ざり合っている。鼻を使えば2トンもの丸太を運ぶこともできるし、ピンや小さな硬貨を拾い上げることもできる。

また、頭蓋骨そのものについても、

そこには骨一般に見られるあらゆる特質がみられる。非常に厚く強固な部分もあれば、紙のように薄い部分もある。強度と構造に対して自然が生みだす感覚は、こうした骨を研究するときに見出す驚きの1つだ。

と述べています。象の頭蓋骨をさまざまな角度から観察し、丹念に写し取った本作からは、頭蓋骨の構造そのものへの驚きと、自然や生きものに対する深い敬意が伝わってきます。生きものの痕跡から造形の本質に迫ろうとする姿勢は、ムーアならではのまなざしといえるでしょう。

### 想像上の生きものを描く

これまで、実在する生きものがどのように捉えられ、表現されてきたかを中心に辿ってきました。一方で、作品の中には、この世には存在しない生きものを扱っているものもあり、そうした存在も古くから美術の主題として用いられてきました。ここからは、想像上の世界へと足を踏み入れてみましょう。

駒沢利斎(駒沢家7代)(1770-1855)《木彫獅子香合》(no.46)にみられる獅子はその一例です。もともと獅子はライオンをもとに生み出された存在でしたが、東アジアでは実物を見る機会がなかったため、想像を交えながら独自の造形が発展しました。獅子は、現実の動物像を超えた霊獣として位置づけられ、守護や力の象徴として格好の主題として用いられました。本作でも荒々しく彫られたたてがみや目を見開きキッとむいた牙は力強く、霊獣としての威厳が表されています。

樂慶入(樂家11代)(1817-1902)《赤樂茶碗 ノンコウ七種 鶴うつし》(no.47)は樂家三代の道八(ノンコウ)が作った赤茶碗のうつしで「鶴退治」を主題とする茶碗。鶴もまた、想像上の生きものです。『平家物語』第4巻に記される「鶴退治」には、平安時代末期、近衛院を夜ごと悩ませた怪物・鶴が登場します。その姿は、頭が猿、胴体は狸、尾は蛇、手足は虎で、鳴き声は似ており、源頼政が討伐を任せられ、井早太を伴って射止めたという説話です。鶴が現れる際には、渦巻く雷雲が立ちこめる兆しがあったとされていますが、本作では、肝心の鶴は意匠として描かれず、この雷雲のみが表現されています。直接的な描写を避けることで、不穏な気配や異界的な世界観がさらに増幅されます。

《姫谷焼染付鳳凰文皿》(no.48)や藤井厚二(1888-1938)《黄釉龍耳花瓶用》(no.49)に用いられている鳳凰や龍もまた想像上の霊獣。これらの存在は、吉祥や権威の象徴として古くから用いられてきました。現実の枠を超えた存在であるからこそ、人間の畏敬や願望、未知なるものへの恐れを表すことができます。実在の動物を描く場合とは異なるかたちで、表現の世界に奥行きを与えているともいえるでしょう。

### 擬人化して描く

最後に紹介するのは、中野恵祥(1899-1974)の《休む蛙》(no.54)です。真鍮の薄い板を切りぬき折り曲げるなどして、輪郭や細部が形づくられた蛙です。注目すべきは蛙が「休んでいる」という点でしょう。蛙が人間のように腰をかけ、くつろぐ姿は現実にはありえません。

このように動物を人の姿になぞらえて擬人化する表現は、日本美術においては《鳥獣人物戯画》(平安時代、高山寺蔵)のように古くから見られます。そこでは兎や蛙が人間のように走ったり動き回ったりする姿が描かれ、動物に人間の所作を与えることで、親しみやユーモアが生み出されています。《休む蛙》においてもそ



No.25 ヘンリー・ムーア  
《最近ムーアの工房に運びこまれた象の頭蓋骨(「象の頭蓋骨」)》1969年  
© The Henry Moore Foundation.  
All Rights Reserved, DACS & JASPAR  
2026 / www.henry-moore.org  
G4204



No.46 駒沢利斎(駒沢家7代)《木彫獅子香合》江戸時代



No.47 樂慶入(樂家11代)  
《赤樂茶碗 ノンコウ七種 鶴うつし》明治時代



No.54 中野恵祥《休む蛙》1957年

うした系譜を思わせるユニークさが垣間見られます。素材や技法は簡潔ですが、無駄のない造形や巧みなデフォルメによって、洗練された印象とユーモアが際立っています。腰を下ろす蛙の姿は、動物と人間の境界をゆるやかに越え、見る者に親近感を抱かせます。

## 4. おわりに

本展で紹介したのは動物表現の中でもほんの一部にすぎません。しかし、これらから作家たちがそれぞれの視点から生きものを見つめ、その姿を選び取り、特徴を抽出し、独自の方法でかたちに行っているのが見えてきたのではないのでしょうか。美術作品の中で描かれる「生きもの」のさまざまなかたち。かわいらしさや親しみやすさが、私たちが自然に作品へと近づけてくれることでしょう。そうした身近さを感じながら、そこに込められた多角的なまなざしや表現の多様性に目を向けてみると一層色鮮やかな「せかい」が広がってゆきます。そして展示室を巡ったあと、身のまわりの生きものにふと目を留めたとき、その姿がこれまでとは少し違った視点で見えてくるかもしれません。

(学芸員 釘屋奈都子)

- 註
- (1) 吉原英雄「『ペット・ショップ』開店によせて」『版画芸術』、阿部出版、1979年、No.25-春、p.178。
  - (2) 草間彌生「クサマトリックス展の発表によせて」『クサマトリックス/草間彌生』、角川書店、2004年、p.65。
  - (3) 「圓錐勝蔵彫刻美術館HP収蔵作品」圓錐勝蔵彫刻美術館、<https://www.city.onomichi.hiroshima.jp/site/entsuba-museum/45237.html> (2026/3/4最終アクセス)
  - (4) Henry Moore: "Elephant Skull" Gérald Cramer, 1970, introduction

### 主要参考文献

- 三浦慎悟『動物と人間 関係史の生物学』東京大学出版会 2018年。  
田中雅夫『写真130年史』株式会社ダヴィッド社、1970年。  
富岡市立美術館・福沢一郎記念美術館編『生誕100年記念 福沢一郎展』図録、1998年。  
セゾン美術館編『ヘンリー・ムーア』展図録、1992年。  
金井紫雲『東洋画題綜覧』芸興堂、1941-1943年。  
松濤美術館編『中野恵祥一板金の造形』展図録、1992年。

## 展示室のそとのせかいへ

展示室のそとにも、ふくやま美術館の周りには動物をモチーフとした作品があります。展示室を出て、美術館の中をゆっくり散策しながら、さまざまな「生きもの」たちに目を向けてみてください。



圓錐勝三 《輪と遊ぶ》1988年



圓錐勝三 《自然の恵み》1988年



圓錐勝三 《弟》1954年

## 生きものmemo

作品をじっくり観察して、どの生きものが気になったか書いてみましょう。  
お気に入りの作品や心に残った部分、そう感じた理由もあわせてメモしてみてください。